

「その名によってあらゆる国の人々に 告げ知らされる」

主の昇天・C年（16.5.8）

キリストの時代から教会の時代へ転換

主の昇天の祭日の意義を、今日の聖書朗読箇所を手掛かりにしてご一緒に考えて見ましょう。

まず、今日の第一朗読ですが、使徒言行録からとられております。それは、今日の福音を書いたとされる福音記者ルカが、その福音書のいわば「続編」として編集した初代教会の宣教活動の記録にほかなりません。

ところで、第一朗読の11節で言われている「天に上げられる」というのは、「イエスが十字架に上げられて殺され、神によって高められ、栄光の座に挙げられた」ことを表わす特別な言い回しであります。ですから、イエスの復活を、「高举」という用語で表すことによって、「イエスの復活は単なる死からの蘇^{よみがえ}りではなく、神によって高く上げられ、再臨の時まで、天から地上の教会を指導し、今な救いの業を続けておられる」という私たちの信仰告白と言えましょう。

ですから、復活と高举は全く同じで出来事を表わし、いずれも神のもとへと上げられることなので、天に昇ること昇天になりますが、目撃者の視点から描かれるときには、まさに歴史的出来事として語られるのであります。それを福音記者が実際に書いたことになるのであります。

そこで、ルカは、特に今日の福音の50節から53節つまり「イエスは、そこから彼らをベタニアの^{あた}りまで連れて行き、手を上げて祝福された。そして、祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。彼らはイエスを伏し^{のち}拝んだ後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて、神をほめたたえていた。」の段落と、今日の第一朗読の6節から11節までを、まさに橋渡しとしてルカ福音書と使徒言行をみごとに結びつけているのであります。

ここで確認すべきことは、主の昇天は、イエスと弟子たちとの別れとして終わるのではなく、むしろイエスの再臨（救いの完成）との間の時代すなわち教会の時代を準備する出来事であったと言えましょう。

なぜなら、死者の中から復活し、神の栄光の右の座へと上げられたイエスは、今なお聖霊によって教会を導き、救いの業を続けておられるからにほかなりません。

なぜ天を見上げて立っているのか

とにかく、ルカは、今日の第一朗読の 11 節で、天に上げられ雲に覆われて見えなくなったイエスを見つめていたとき、何と白い服を着た二人の天使に諭されたと次のように報告しております。

「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」と。

これは、今は、ただイエスとの別れの感傷に浸っているときではなく、早速教会に託された使命の遂行に取り組むべきという勧告ではないでしょうか。

つまり、救いの完成の暁に、イエスが再び栄光に包まれて天から来られるそのときまで、わたしたちはイエスの救いの業に積極的に参加すべきではないかという励ましにほかなりません。

では、具体的にその使命とは一体どんな働きなのでしょう。それは、まず、第一朗読では、「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てにいたるまで、わたしの証人となる。」と、厳かに宣言されております。つまり、復活のイエスの証人となることであります。それは、今日の福音では、『メシアは苦しみを受け、三日目の死者の中から復活する。また、罪の赦しを得させるため悔い改めが、その名によってあらゆる国の人々に宣べ伝えられる』と。エルサレムから始めて、あなたがたはこれらの証人となる。」と詳しく説明されております。

このように、使徒言行録では、まさに聖霊の働きに焦点が当てられ、一方、ルカ福音では、弟子たちが証しすべき内容が説明されております。特に、「その名によって」と、新約聖書における宣教用語をもちいて、イエスがなされた救いの業にわたしたちが与かることが強調されております。

また、「あらゆる国の人々に宣べ伝えられる」と、エルサレムから始まる宣教は、まさに地の果てまで、全世界に広がって行く教会の宣教活動にほかなりません。

聖霊から力を注がれ地の果てまで、福音を宣べ伝えるために派遣される

ちなみに、わたしたちは、来週、聖霊降臨の主日を迎え、この司教座聖堂で合同堅信式を司教様によって執り行われます。

実は、今日の第一朗読で、聖霊が強調されたのは、イエスご自身に、ガリラヤでの宣教

活動を始めるに当たって、まず、ヨルダン川で聖霊が降ったように（ルカ 3. 21-22 参照）、聖霊こそ、わたしたちが宣教活動を実践するための神からの力にほかならないからであります。

ですから、まさに教会の誕生であるエルサレムでの聖霊降臨の出来事で、弟子たちは、聖霊に満たされてそこに集まっていたあらゆる国々から来ていた人々に向かってそれぞれの御国言葉で福音を宣言できたのであります。（使徒言行 2. 4 参照）

つまり、教会の宣教活動を極めて具体的に導いたのは聖霊にほかなりません。たとえば同じ使徒言行録に次のような報告があります。

「さて、彼らはアジア州でみことばを語ることを聖霊から禁じられていたので、フリギア・ガラテア地方を通って行った。ミシア地方の近くまで行き、ピティニア州に入ろうとしたが、イエスの霊がそれを許さなかった。」（同上 16. 6-7）と、宣教活動が、すべて聖霊の導きと助けにおいて実践されていたことが確認されます。

ちなみに、パウロは、宣教活動の基本的仕組みを極めて明解にその手紙の中で強調しております。

『主の名を呼び求める者は、だれでも救われる』のです。ところで、信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。聞いたことのない方を、どうして信じられよう。また、宣べ伝える人がいなければ、どうして聞くことができよう。遣わされないで、どうして宣べ伝えることができよう。・・・実に信仰は、聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです。」（ローマ 10. 13-17）

今週もまた、このミサによって派遣される、それぞれの家庭、職場、地域において福音を宣べ伝えることができるよう共に祈りましょう。